

一人当たり最多の 爆撃を受けた国

ラオスは、ニューヨーク・タイムズの「世界で一番行きたい国」調査（2008年）で、第1位に選ばれた国だそうです。訪問前はなぜだろうと思いましたが、滞在中、少しずつラオスの魅力に目覚めていきました。人々は温かく穏やかで、時はメコン川のように緩やかに流れ、料理はとてもおいしい。現地では、「老後はラオスに住みたい」と口をそろえるJICA関係者に何人も出会いました。

そんな魅力的なラオスは、東南アジアの最貧国でもあります。ラオスの開発を阻んでいる深刻な問題、それは不発弾です。日本ではあまり知られていませんが、ラオスはベトナム戦争時代、一人当たりで換算すると、世界で最も多くの爆弾が落とされました。不発弾が残る土地は、農業をするにも、学校や病院を建設するにも、事前の調査や除去活動が必要で、開発を遅らせる原因になっています。

今回の視察では、不発弾による被害が深刻な地域の一つである南部のサラワン県を訪れ、被害者3人から話を聞きました。被害に遭った場所を尋ねると、女性2人から、「料理のために火を起こしたら、その熱で地中にあった不発弾が爆発



不発弾の処理の現場

特別レポート

高橋尚子さんが見たラオス —もう一つの戦争と障害者スポーツの芽

緩やかな時の中で、人々がつつましく心豊かな生活を送るラオス。

しかし、その暮らしは不発弾の危険と隣り合わせでもある。

今年2月に現地を訪れたJICAオフィシャルサポーターの高橋尚子さんが、その現状と障害者スポーツの実態を伝える。

ASEANパラゲームで銅メダルを獲得したボン選手に話を聞く高橋さん



したんです」と答えが。男性は、「農業で杭を打っていたところ、運悪く不発弾に当たり、被爆して片足を失いました」と話してくれました。

村の人々が危険と隣り合わせの生活を送っていることを知り、衝撃を受けました。農村部に住むラオスの人々にとって、戦争はまだ終わっていないのだと思います。不発弾のリスクを回避する方法を伝える教育や啓発活動の重要性を痛感しました。

JICAは、「不発弾除去組織における管理能力強化プロジェクト」の実施や、

平和構築無償資金協力を通じて機材（灌木除去機）を供与するなど、不発弾処理に取り組むラオスの政府機関「UXO Lao」への協力を行っています。とはいえ、視察したサラワン県で処理が済んでいるのは県全体の1%に過ぎず、他の地域も含め、今後も途方もない努力が必要です。継続的な協力が不可欠だと感じました。

ラオスの障害者とスポーツ 生きがいを見つけて

不発弾によって障害を負った方を含め、ラオスでは障害のある人が、人口の8%に相当する約53万人いるといわれています。そんなラオスで、障害者スポーツを長年にわたって支援している日本のNPO法人「アジアの障害者活動を支援する会（ADDP）」の活動も視察しました。ADDPは、草の根技術協力事業を通じてJICAとも連携しています。

不発弾の被害者への聞き取り



ADDPが支援した選手の中に、ラーさんがいます。現在20歳の彼女は、10歳のとき、友達とたき火をしていた際に不発弾が爆発し、破片が目刺さって全盲になりました。学校にも行けず、泣くばかりの日々を送っていたところ、ADDPの勧めで盲学校に入学。その後、運動神経の良さを生か

して、障害者スポーツの「ゴールボール」の中心選手になり、昨年12月のASEANパラゲームでは、銀メダルを獲得しました。ゴールボールと出会ってから、性格も明るくなり、リーダーシップを発揮できるようになったそうです。視覚障害のある16歳のボンさんも、ADDPの支援を受けた一人。陸上選手の彼女は、昨年のASEANパラゲームで銅メダルを獲得しました。この快挙を支えたのが、ADDPから派遣され、陸上競技を指導している羽根裕之さんです。

しかし、ある時、仕事先で事故に遭い、左手の自由を失います。「左手が不自由になり、最初はとても荒れて、喧嘩腰になりました。最初の時期もありました。でも、障害者陸上に会ったおかげで、人生が一変しました。やりがいを見つけたんです」。そう語る羽根さんは、07年に台湾で開かれたIWAAS世界選手権で幅跳びの日本記録を更新。多くの仲間にも出会ったそうです。

一方、ラオスの障害者スポーツを取り巻く環境は依然として厳しいといえます。そもそも障害者が家から出る機会が少なく、スポーツができることを知る人は多くありません。たとえ知っていても、指導を受けられる首都のビエンチャンまで自力で来ることが難しいという問題があります。

そんなラオスの現状を知りつつも、羽根さんは前向きです。「障害者スポーツの裾野を広げていくことが大事だと考えています。障害者も健常者もない世界をつくりたい。東京パラリンピックに、ラ

オスの選手団の一員として、選手を連れて行くのが今の夢です」と語ってくれました。

スポーツ選手の引退後のキャリアを取り巻く環境は厳しく、特に障害者にとっては難しい問題です。日本もこのような課題を抱える一方で、世界にはラオスのように、障害者スポーツの底上げが求められている国があります。羽根さんがADDPを通じて、ラオスで生き生きと活躍している姿を見て、これこそ途上国での障害者スポーツ支援のロールモデルだと感じました。

日本は、2020年までに100を超す国々で、1000万以上の人々にスポーツの喜びを届けることを目指す「スポーツ・フォー・トゥモロー」という国際貢献プログラムを実施しています。このプログラムを旗印に、4年後の東京オリピック・パラリンピックの開催に向けて、私たち日本人ができることはまだたくさんある——。そう感じたラオス訪問でした。



ADDPの羽根さんと

高橋尚子

たかはし・なおこ
中学から陸上競技を始め、大学卒業後は実業団へ。1998年の名古屋国際女子マラソンで初優勝。2000年のシドニーオリンピックでは金メダルを獲得し、同年、国民栄誉賞受賞。現役引退後は、公益財団法人日本陸上競技連盟理事などを務める他、環境活動やスポーツキャスター、JICAオフィシャルサポーターなどでも活躍中。